

知的障害児のための療育活動（キッズサークル、サマースクール）

事業代表者：宇都宮大学教育学部 教授 池本喜代正

1. 事業の目的・意義

(1) 事業の意義

知的障害のある子どもは、放課後や休日（長期休暇）においてなかなか自分自身で余暇活動を組み立てることができず、多くの場合は保護者（特に母親）が面倒を見ており、家庭でゲームやテレビで時間を過ごすものが多いのが実情である。そのような知的障害児に対して学校以外の場面で他の友達と一緒に十分に体を動かす機会は、なかなかない。そこで、大学という場のリソースと学生という人的リソースを生かし、知的障害のある子どもたちの活動を保障する機会を月1回提供することは、大きな意義がある。将来教師を希望する学生にとっては、障害のある子どもと関わることにより、障害のある子どもの理解、子どもへの適切な接し方、言葉かけや対応の仕方などを学ぶ機会となる。知的障害の子どもと学生にとっての「学びの場」とするために本事業は、これまで14年間継続して実施してきた。

(2) 事業の目的

参加する知的障害児にとっては、発達を支援するために、①楽しみながら体を十分に動かす、②集団への適応性を高め、注意力・集中力を育て、認知面の発達を促すことを目的としている。

ボランティアとして参加する学生にとっては、知的障害や発達障害のある子どもと実際に関わることを通して子どもの特性を把握し適切な対応方法を学ぶことを目的としている。

また、活動の裏番組として『保護者プログラム』を実施している。参加する子どもたちは、一人で大学に来ることはできないため、必ず保護者の付き添いとなっている。その保護者たちが集まって、お互いの子育てについて話をしたり、先生からの話を聞いたりするなど、保護者の学びと仲間作りを目的としている。

2. 事業内容

本事業は、毎月第4土曜日13:30~15:30に実施するキッズサークルと8月に4日間実施するサマースクールからなっている。そして付加的に保護者プログラムを実施している。

(1) キッズサークル（知的障害児療育活動）

キッズサークル（以下、キッズ）は、月1回宇都宮大学第2体育館にて開催しており、2013年度のキッズの活動は、以下の通りである。

1) 参加者数

キッズの対象としているのは、原則として知的障害のある児童である。当然ながら広汎性発達障害を併せ有する者も少なくない。2013年度に参加登録をしているものは、小学生42名、中学生6名である。今年度から、グループ編成やボランティアの人数の関係から、登録者を48

名に限定し、参加しないものが出た場合には参加希望者を追加することとした。子どもたちは全員、特別支援学級あるいは特別支援学校の在籍者である。

子どもたちの参加者数は、月によって異なるが、大体35名から45名程度であった。また、きょうだいたちも5~6名参加している。

ボランティアは、特別支援教育専攻の学生がほとんどであり、毎月20~25名程度の参加がある。今年は作新学院大学の学生や高校生の参加もあった。全体を掌握し、活動内容にコメントをするために、現職教員や卒業生も毎回数名参加している。

2) 内容

全員でリズムカルな音楽に合わせて集団の大きな流れに沿って、歩く・走る・止まる・手つなぎ歩行などの動きを行うダイナミック・リズム、ボランティア学生による音楽演奏やペープサートなどを見たり聴いたりする集会、みんなで一緒に楽しむダンスやゲーム等によって構成されている。

進行の中心となっているのは特別支援教育専攻の3年生であり、毎回事前に集まり、集会やゲームなどの内容・担当を決めたり、ペープサートなどの教材を作成したり、ダンスの振り付けを考えたり、ハンドベルやリコーダーなど演奏の練習をするなどの準備を行っている。知的障害児や自閉症児の特性を考えて、教材作成を行っており、音楽や視覚的な教材を多く取り入れている（写真1）。



写真1 ペープサート

キッズは、8つのグループごとに、学生担当（グループ・リーダー）が配置され、各内容の担当者リーダーが順序よく交代しながら全体指示を出して進行している。主な活動内容は、ダイナミックリズム、集会（パネルシアター、手遊び歌、ハンドベル、動作模倣など）、リトミック、ゲーム、ダンスで構成されている。

障害が重く、多くの支援が必要な子どもに関しては個別的な支援を行うようにしている。主な活動の様子を写真で示す（写真2・3・4）



写真2 集会での様子



写真3 ポンポンを使ったダンス



写真4 サーキットの中でのキャタピラー

参加する子ども達は当然保護者の付き添いで通ってくるわけであるが、保護者は子ども達の活動を見学することも自由であるが、キッズの裏番組として「保護者プログラム」として月ごとにテーマを設けて話し合いや学習会を行っている。講師としては、大学教員、小学校教員（特別支援学級担任）、福祉関係者など多様である。

(2) サマースクール

1) ねらい

長期休業中（夏休み）に、知的障害児のためのサマースクールを開催し、知的障害児に対する療育的活動を中心としたコミュニケーション能力・集団参加能力などを育成する。ボランティア参加の学生は、障害児と直接触れ合うことを通して、障害児に対する指導のあり方を学ぶ。

2) 期日： 2013年8月9日（金）～12日（月）

3) 参加者

今年度の参加者は、小学生30名、中学生3名の計33名であった（全員4日間参加）。

全体掌握の教員・院生は6名、事前準備も含めて企画担当のスタッフは11名、当日参加のボランティアは52名であった（4日間参加の者が多いが、1～3日間参加の者もいる）。学生は、特別支援教育専攻の学生・院生が大半であるが、他学科の教育学部学生や農学部・工学部の学生、そして作新学院大学、国際医療福祉大学、白鷗大学、筑波大、東洋大学、宇都宮医科大学衛生士専門学校の学生も参加し、学際的になっている。

4) 内容

サマースクールは、宇都宮市教育委員会の後援を得て、宇都宮市城山地区市民センターを会場に実施している。

内容はほぼ例年通りで、1日目・2日目の午前中は、朝の会、ダイナミック・リズムやゲームなどを行って体を動かし、午後はコロコロ貯金箱、貼り絵などの制作活動を行った。

3日目は、宇都宮市森林公園に行き、体力別に8グループに分けて活動を行った。コースも古賀志山コース、富士見峠コース、チャレンジコースなど子どもに合わせた設定をしている。グループごとに現地にて昼食を食べて、午後はダンス練習などを行った（写真5・6）。

4日目は、午前中カレーライスとサラダなどの調理活動を行った。子どもの能力や生活年齢に合わせて調理の活動内容を変えており、子どもの実態に即した活動となっている（写真7）。

午後は、練習してきたダンスや自分たちで作った作品を保護者に発表したり、手品ショーを見るなどのお別れ会、そして閉校式を行った（写真8）。

毎回、開催後に保護者からのアンケートを取っており（回収数23）、その回答を見るならば企画・活動に対する満足度は、「満足」（20人）「やや満足」（3人）と、満足度の高い結果である。自由記述としては、「細かく子どもの様子を書いていたので、活動の様子が手に取るように分かり、とても安心だった。」「いろいろ相談しながら参加できた。この個別対応が非常に良かった。」「学校以外のお友達とも関わることができたのでよかったと思う。」「集団内では話に集中することが苦手だが、サマースクールで少し成長したように感じた。」などの感想があった。



写真5 ハイキング前の集会



写真6 古賀志山のハイキング



写真7 カレーライスを待っています



写真8 最終日、全員で記念写真

3. 事業の成果

キッズサークルは、大学における知的障害児の療育活動であり、障害のある子どもたちにとって楽しく安全に活動できる貴重な機会である。今年度は、子どもたちの顔触れも大きく変わり、小学校低学年の児童が比較的多くなった。毎回参加することで、子どもたち自身も流れを理解し、見通しを持って活動に参加でき、集団としてのまとまりができています。

ボランティアとして参加している学生にとっては、子どもの前で自分達の作成した教材を提示したり、手遊び歌などをしたり、子どもたちに働きかけるという教師的な活動となっており、「教師としての実践力養成の場」である。この活動に参加している学生は、教員志向が高く、過去において教員になった者の割合が非常に高い。サマースクールは、キッズサークルの延長線にあり、マンツーマンで子どもに学生がつき、障害のある子どもと一日を通して一緒に活動することによって障害児教育への関心も高くなるという結果が出ている。アンケートからも参加して達成された項目で「障害児とかかわる経験を積むこと」が最も多く、「特別支援教育に大変興味関心が深まった」にほとんどが回答している。

キッズサークルとサマースクールは、特別支援教育専攻の学生を中心に14年間継続してきた活動であり、ボランティア活動に関心がある学生が障害児の特性や子どもとの関わり方を学ぶ有効な機会である。指導技術、運営・企画の仕方も下の学生が上の学生から学び、引き継がれており、年々レベルアップしている。もちろん活動の主体である障害のある子どもたちにとっても、このような手厚い指導の下で体を動かすという活動は他に類を見ない活動であり、子ども達も喜んで参加しているとともに保護者からも非常に意義深い活動であると高く評価されている。

4. 今後の展望

2014年度も事業を継続する予定であり、現在参加希望者を募っている。ボランティアも、新入生の学生を勧誘し、宇都宮大学の他学科の学生や作新学院大学などにも、声かけをしていくつもりである。

近年の参加者の特徴としては、比較的高機能である自閉症スペクトラム障害の児童の割合が増えていることやダウン症児の数も増えている。障害種・程度が多様化していく中で、発達段階や障害の特性に応じた指導を行っていききたい。子どもたちの実態・特性に応じた活動内容・支援方法についてキッズのボランティア学生とともに検討していきたい。